

富山市の山小屋トイレとのかかわり

森 雅志（富山市長）

1. 始めに

富山市は、水深1,000mの富山湾から標高3,000m級の山々が連なる雄大な立山連峰まで、標高差4,000mの多彩な地勢を誇る、水と緑に恵まれた都市である。

山々からの清らかで豊かな雪解け水が注ぎ込む富山湾は、天然のいけすと称され、ホタルイカや白エビなど、他では味わえない海の幸が豊富だ。

また、「おわら風の盆」などの伝統行事や、古くからの町並みが残る八尾地区、北前船の寄港地として栄えた岩瀬地区などでは、富山の歴史や伝統に触れることができる。

さらに、富山市には、日本百名山の薬師岳（標高2,926m）、黒部五郎岳（同2,839m）、水晶岳（同2,986m）、鷲羽岳（同2,924m）の他、赤牛岳（同2,864m）、野口五郎岳（同2,924m）、三俣蓮華岳（同2,841m）などが在り、市内各地からは3,000m級の北アルプスの雄姿を眺めることができる。

私はこれまでに、市域の北アルプスをすべて縦走踏破し、すべての山小屋（12箇所）に立ち寄り、山小屋経営者から直接話を聞くことによって、山が抱える多くの課題を知ることができた。

自然を守りながら、多くの登山客に宿泊や休憩の場所を提供してくれている山小屋の役割はきわめて大きく、山岳観光を観光施策の一つの柱と位置づけている立場からも山小屋を応援することは市の責務だと思う。とりわけトイレの整備を支援することは、利用者への配慮の面からも環境保護の面からも大切なことである。

2. 「富山市山小屋トイレ整備・改良事業補助制度」の創設

山小屋は奥地にあるため、平地とは違い施設の整備には多額の経費がかかるうえ、工期も限られるなど多くの課題を抱えており、中でもトイレの整備には水、電気、放流先、利用者変動、寒暖の変化などの制約を受けることから、従来のトイレの状況は決して快適なものではなかった。

富山市では、平成19年（2007年）4月に山小屋トイレの改修に対して支援するため、「富山市山小屋トイレ整備・改良事業補助制度」を創設し、国や県の補助と併用すれば事業者負担をかなり軽くできるものとした。そのうえで山小屋を訪問する際は、山小屋の経営者の皆さんにトイレ環境の改善を勧めてきた。

その結果、富山市にある民間事業者が経営する12箇所の山小屋のうち、これまでにトイレの改修が済んだものは8箇所、うち、市の補助を申請したものが4箇所となった。

このほか、低山ではあるが富山市が管理する牛岳山頂トイレ、白木峰山頂避難小屋トイレ、白木峰8合目トイレの改修を順次進めてきた。

3. 山岳観光・市長サミット

平成21年（2009年）8月には、私の呼びかけで、富山市と岐阜県高山市、長野県大町市の市境にある北アルプス「三俣蓮華岳」（標高2,841m）の山頂近くにある三俣山荘で、3市の市長等による「山岳観光・市長サミット」を開催した。私を含め、大町市の牛越徹市長、高山市の荒井信一副市長が自らの足で登って山荘に集い、登山道整備や自然保護など3市に共通する課題について現場で語り合った。

サミットには周辺の山小屋を経営する伊藤さん（三俣山荘）、五十嶋さん（太郎平小屋）、上條さん（烏帽子小屋）、小池さん（双六小屋）も加わり、登山道の安全確保策をはじめ、登山道やトイレなど山小屋施設の整備、植生の再生などについて意見を交換した。

提案者である私から、「これをきっかけに3市が連携し、登山客に喜んでもらえる取り組みを考えたい。」と述べ、牛越市長からは「女性グループが増えるなど新しい登山者の傾向がみえる。登山道整備などで受け入れ態勢の充実が必要」また、荒井信一副市長からは「登山を単に観光として捉えるだけではなく、文化として位置づけ、振興を図る視点も必要」などの発言があった。

最後に、牛越市長が「山岳観光の振興の観点から安全登山の環境整備や自然環境保全に努め、3市は今後一層の地域連携を深める」との宣言を読み上げてサミットを終了し、各自歩いて下山した。

また、平成22年（2010年）11月には、山岳観光振興の連携を強化することを目的として、3市の事務担当者、山小屋経営者による会議を行った。

4. 「山はみんなの宝！全国集会」呼びかけ

平成22年（2010年）6月に国の行政事業レビュー（事業仕分け）において、民間の山小屋のトイレ整備に補助金を支出していた環境省の事業が、「山小屋には競争原理が働かないため、規制で山小屋自身に整備してもらい登山客からの利用料で回収した方が効率がよい」「受益者、汚染者負担の原則から補助は説明がつかない」などという理由で「廃止の判定」をされた。この判定を不服とする集会の呼びかけ人の趣旨に私も賛同し、東京都内で7月22日に危機感を募らせた山小屋や山岳関係者ら約150人が集まって全国集会を開催し、その後、環境省は、補助対象を、国立公園や国定公園内で一般登山者へ開放す

るなど公共性が高い山小屋トイレに限定するなどの条件を付し、事業を継続してきたことは周知のとおりである。

5. 韓国との山岳観光交流

私は、平成23年（2011年）10月に韓国の蔚山(ウルサン)広域市庁において、蔚山広域市の朴孟雨(パク・メンウ)市長と持続可能な山岳観光開発と共生発展のための共同宣言文に署名した。共同宣言文では山岳観光活性化のための協力の重要性を深く認識し、両市の間で自然と文化遺産の保全、質の高い山岳観光商品の開発を通じた地域経済活性化策を協議し、交流協力推進のための協定を締結するよう努力していくことについて合意した。

6. 終わりに

私はこれからも、トイレを含む山小屋施設を快適なものにすることで、山に行く人、自然を愛する人、立山連峰の峰々に触れることで故郷に誇りを感じてくれる子供達、県外や国外からの立山連峰ファンを増やしていきたいと考えている。



富山市・呉羽山展望台からの立山連峰



雲の平山荘・全体外観
(赤丸部分・トイレ)